
秋、赤い空、白い羽

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋、赤い空、白い羽

【Nコード】

N1077K

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

一人の少女、一人の少年。

何もない筈の日曜日。

何もなければ良かったのにと、ある少女は思う。

何も知らずにこの日を心待ちにしていた少女が居る。

何も知らず、普段通りの一日としてこの日を迎えた少年が居る。

——何が悲劇なのか。

（前書き）

お題『手羽元』です。

鶏が鶏肉を食べれば共食いだ。

人間があまり猿を食べないのも、共食いに似たところがあるからだろうか？

まあ、別にそんなことをいつもも考えている訳ではない。

そんなことを思いついたのもふとしたきっかけがあっただ。

そのきっかけが目の前に居る。

可愛い女の子だ、金髪で、しかも染めた物ではなく地の髪の様。多分、中学生ぐらい。

俺の妹——真美という——と同年くらいだろう。

妹も外国人の友達が出来た、と言っていた。日本語が話せる女の子だそうだ。

最近が多いのだろうか？

ここはとあるファストフードの店。白いスーツに眼鏡の髭おじさんの人形で有名な店。駅前の一等地に建てられた店舗のなか、『こちらでおめしあがり』になっている。

彼女は健啖で、五つ目のチキンに手を伸ばしていた。俺はそれを見ながらスコーンのような焼き菓子にシロップをかけて食べていた。

何故、共食いなどと言う単語が浮かんだのか。

——それは一枚の名刺が原因。

目の前の少女から渡された名刺。それには『ミユリエル・カミュ』と書かれている。それは良いのだが、職業欄。

——『天使』。

どっちも羽があるよなあ、と思いながら。

「で、俺に何の用なの？ 天使さん」

信じていないから、必然、皮肉気な口調になってしまふ。

だが、まあ、さほど隠す必要も感じない。

高校生のお寒い財布の中から野口さんを二人ほど引き抜いていった可愛さは認めるけれど。

——ああ、もう、唇の回りに油がついてる。

トレイの上のナプキンを渡しながら質問の答えを待つ。

「んー、信じてませんね？」

「……信じるって方が難しいと思うけど？」

天使、御使い、エンジェル。

羽の生えた、人型。

翻って目の前、彼女に羽は見あたらないが、たしかに、綺麗だ。

『天使の様な』という表現なら使うのもやぶさかではない。

何よりもその柔らかな絹の様に光沢のある金髪が日本人離れた空気を作り出している。

ポンチヨの様に体を大きめに覆う衣装を身に纏っている。スカトは限りなく黒に近い青。ポンチヨは緞帳の裏の様な素材——確か、サテンだったか——、白の一枚の上に刺繍で百合が黒く画かれている。この黒も正確には限りなく黒に近い青。

——だがそれでも、天使と言うのは……。

「汝、神を試すなかれ、ですよ？」

彼女はそういつてにつこりと笑った。

もう一度名詞を確認する、ミユリエル・カミュ。

天使。

——まあ、いいか。

「天使かどうかはさておいて——もう一度聞くけど、何の用なの？」
聞くとカミュは空になった紙コップを音を立てて啜ったあと、こちらを真っ直ぐ見て口を開いた。

「告知です」

天使の役目は神様の言葉を伝える事だという。

エヴァンジェル。福音書という意味の言葉。これも天使を表すエ
ンジェルと同じ語源らしい。

その天使に羽があるのは神と人の元を行き来し言葉を伝えるため。
有名などころでは絵画のモチーフとして使われる『受胎告知』な
だろう。黙示録で喇叭を吹くのも、預言成就の告知である。

だから、そう、真偽はともかく、天使を名乗る彼女もその言葉は
自身のものではない。

「天使は受胎告知とか、しますよね。その辺は有名ですけど最近
あんまりそういう仕事がなくて。死を告げることの方が多いです」
死神みたいですよねと彼女は自虐的に笑う。

「……って事は、俺の死を告げに来たとか？」

それなら、まあ、解りやすい話である。

言い出す前に食事をたかるのはどうかと思うが。

「んー、それは違うんですよ。飯塚勇真さん」

彼女は俺の名前を呼んだ。教えていない名前を。

「俺の名前……」

「ええ、知ってますよ」

天使ですからと、彼女は言う。

「……まあ、いいか。それで？」

「えっと、でも、死を告げに来たというのは嘘じゃないです。ただ、あなたの死ではありません」

彼女は俺の胸を指さしながら言った。

新しい紙ナプキンを取ると、ポンチヨの内側からペンを取り出した。それは無骨なデザインの円柱にしか見えないペン。

そのペンを走らせて紙ナプキンに文字を書く。

——斗波科乃。

「何？」

「人の名前です」

「だから？」

「——この人が死にます」

カミユの表情からは何も読み取れなかった。

追加でたのんだ、チキンが一つ。

カミユはウイングと通なオーダーをしていた。

「ここって、鳥の腕ですよ。人間で言うなら二の腕？ 二の腕と言えば、胸の感触と一緒にかかりますよね」

なかなか、俗っぽい事をいう。

その言葉に思わずカミユの胸元を見る。

ポンチヨは余裕のあるサイズで、少なくともその上からふくらみを視認することは出来なかった。

——まあ、見た目的にも妹と同じくらいの年齢に見える。
——期待はしてない。

……カミユの目つきに怒りが籠もっている様な気がする。

「——話を戻します。斗波科乃さん、彼女の話です」
知らない名前。女の子らしい。

「彼女の事は知りませんよね？」
聞かれて、ああ、と答える。

ペンをポンチョの中にしまった彼女はそのままの動きで一葉の写真を取りだした。

そこには数人の少女が写っている、入学式か何かの写真らしい。制服は真新しく、中心に写っている少女は笑顔でピースをしている。

肩下数センチの髪は黒い。優しそうな目元、すっきり通った鼻筋。美人な顔だ。少し頬が紅潮しているのは入学式に緊張しているからなのか。それとも、写真を撮られたからなのか。

「これが、その——斗波科乃さん？」

「はい。美人でしょう？」

ああ、と首を縦に振る。

否定する理由はない。

「この子が死ぬって？」

「はい、今日中に」

最近の写真だと思う。これが入学式の写真ならまだ高校生だろう。顔色も悪くは見えないし。——死ぬ理由は見あたらない。

「信じられないけど」

「——信じる必要はありません」

「っていうか、この人が死ぬって事をどうして俺に？」

「頼み事があるからです」

そっいつてカミユは真剣な目で俺を見た。

「こ、こんにちは」

緊張しているようだ。

「うん、えっと。初めましてでいいのかな、斗波科乃さん」

「え……あ、はい。飯塚さん——あ、えっと。科乃でいい……」

彼女は迷った様子で、けれど。

「し、しし、科乃と呼んでください」

「——じゃあ、俺も、勇真でいいよ」
にっこりと笑う。

——さて、どうしてこんなことになったのか。

簡単にいうと、カミュの話はデートの仲介のようだった。

今日、日曜日の午後を、斗波科乃のために使って欲しい、というのがお願いの内容。

俺としては美人とのデート、断る理由はない。

『すこし』おかしな女の子の仲介であるが。

『斗波科乃は友人の仲介であなたとのデートが出来ると思っています』

『彼女はあなたに好意を持っていますから、思い残すことが無いようにエスコートしてあげてください』

そんな風に気になることも言われたが、要するに斗波科乃という少女がカミュという少女にデートの仲介を頼んだ、という風に捉えてみれば問題ないだろう。

ただ、カミュという少女のやり方に問題があった、と。

「ほ、ほほ、本日はお願いをきいてくださりありがとうございます、勇真さん」

「いやいや、どうせ、街をぶらつくぐらいの予定しかなかったしね」
本当はバレエ部の部活で使うテーピング——最新の巻き方をマスターするために手持ちは全て使ってしまった——をかうために街に出てきたのだけれど。

午前中から来たのは気まぐれだ。——ちなみに、格好はデートに相応しい物ではなかったのでカミユの用意した服に着替えさせられた。

——結構気合いの入った服だ。

と思うのだが、それは服に無頓着だから、だろうか。
でも、シンプルで。女の子が着て来て欲しい様な服、なのだろうと思わせた。

斗波科乃——彼女の服はコットン素材のタートルネックシャツに北欧民芸の様な模様の入ったニットベストを着ている。下は若干バールン形状になったシンプルなショートパンツで綺麗な脚を出している。

赤のチェックのハイソックス。

彼女のウェーブがかった長い髪には似合っていると思う。

可愛いだけの女の子がしたら『狙いすぎ』っぽいような格好がちように似合う。

「じゃあ、行こっか」

歩く。まずは昼ご飯、だそうだ。

色々なところを歩いた。

まずは昼ご飯、歩きながら食べられる様な物をお店を揃えた通りがあった。最近、若い層に人気のスポットらしいので、そこを

歩いて気に入った物を二人であーだこーだ良いながら食べた。

好きな食べ物をきいて、嫌いな食べ物をきいて。

こんなのどうかなあ、とか、一口どうぞ、とか。

彼女は楽しそうに食べていたが、ハモの串焼きがいたくお気に召したらしく、頬を染めながら一本追加していた。

次に博物館に行った。

博物館デート……自慢じゃないが知的でない俺だが、楽しめた。

トンボ玉——いわゆる、ガラス玉の博物館だった。

彼女は綺麗なトンボ玉を集めるのが趣味らしい。

そういわれてよく見れば、彼女の左手のブレスレットは色とりどりの硝子で飾られていた。

話を聞いてみると、その趣味、コレクションは祖母から引き継いだものなのだそうだ。

ブレスレットも祖母が気に入っていたコレクションで作ってくれた宝物なのだとか。

そう話す彼女の表情は輝いていた。

そして、そんな彼女に解説をして貰いながら巡る博物館は楽しかった。今ならまだトンボ玉の講釈を、受け売りだけど出来そうだ。

博物館を出て歴史的な建物を巡ったり、史跡の様などころも行ってはみたがその光景よりも彼女との会話の方が印象深い。

言葉の端々から彼女が良いところのお嬢様だというのが解つたし、頭も良さそうで、しかし、それが鼻につく感じがしないのは緊張で言葉に詰まるような様子が可愛らしいからだろう。

歩き疲れて、喫茶店に入った。

科乃——いつのまにかこういう呼び方をしていた——が珈琲よりも紅茶の方が好きだということで、科乃がいつも家で飲んでいる紅茶の店に行った。

茶葉の販売だけでなく店頭に喫茶スペースもあるお店だった。

窓硝子にすら、年代を感じる店内。

英国風の店内、出てきたのは紅茶と茶菓子。

俺の前には『カスタードプディング』、彼女の前には『トライフル』。

科乃の頼んだものは知らなかったがイギリスではスタンダードなデザートらしい。俺は無難にプリンだ。

知った顔で、適当に頼むよりはいいだろうと思ったのだ。

そして、紅茶を飲みながら色々な話をした。

二人とも妹がいたので、その話もした。

母親……彼女の今の母親は、再婚した継母らしい。

彼女の妹も義妹で、似ていないところが可愛いと彼女は強く主張していた。

紅茶も香りが良かった、これまで飲んでいたのが何だったのかと言っくらい。

……デザートを、あーん、とかしたのは内緒で。

「えっと、楽しかったです」

科乃はもう大分リラックスしているようだ。

最初の硬さは取れている。どもりも無くなった。

笑顔も柔らかい。

時間はそろそろ太陽が赤くなり始めた頃だ。

そして、科乃はバッグから何かを取り出す。

「あの、これ、受け取ってください」

突き出されたのはブレスレット。

素材は勿論、トンボ玉。

「私のお気に入り、トンボ玉で作りました」

シックで落ち着いた色合い。黒系統のトンボ玉を多く使っている。普段からつけられそう。

用意してきてくれたのだろうか？

「ありがとう」

「はい……それで」

言いにくそうに科乃は俯く。

しばらくして顔を上げて、一世一代という表情と声で。

「また、来週——会えませんか？」

と、絶叫した。

頬が赤いのは、太陽が赤いからか。

来週も会う約束をして、携帯の番号を交換した。

科乃ははにかむような表情で、さようなら、と言って行ってしまった。

手も繋がらないデート、だったけれど。

一度、転びそうになった科乃の二の腕を掴んで阻止した。

感謝の言葉を告げられて、大丈夫そうと判断してから離してしまった。危ないから手を繋ごうと言った方が良かったのだろうか？

そのアクシデントの後二人は少し、頬を染めた。

手を離れたのはきつと、どこかで二の腕と胸の感触が一緒なんて事を聞いたせいだ。

でも、今日は楽しかった——科乃も楽しんでもくれただろうか？

そう思いながらも、

——心に引つかかる事がある。

何だろうか、と夕暮れの中で考える。

夕暮れの中では向こうから来る人間の顔も見えない。
黄昏時、逢魔が時。

——赤の世界。

向こうから来た人間の顔が見える距離。
金髪、白のサテンは赤に染まっている。

こちらを見ている。
哀しい目。

遠くから聞こえてきたのはサイレンの音。
不吉としか思えない、あの音。
不安をかき立てる。

「ありがとうございました」

金髪、カミュは頭を下げた。

「——っ！」

俺はポケットから携帯を取り出して、一番最近に登録された番号にかける。

その俺をカミュは哀しい目で見ている。

誰も出ないと、告げる機械的な声。

留守番電話を録音しますか？ と尋ねてくる。

すつ。とごく自然に握っていた携帯電話を取られた。電源ボタンを押して操作をキャンセルするカミュ。

「斗波科乃は幸福でした」

カミュは感情を押し殺した無感情で告げる。過去形が癪に障る。

「もう、走っても間に合いません。痛みを感じる暇も無かったはずです」

走ろうとしていた俺の脚をカミュの言葉が絡め取る。

「それでも走りますか？」

振り向くと、カミュは綺麗な涙を流していた。ぐちゃぐちゃの表情、わからない。

走って欲しそうにも見える。

冷静でいようとしているようにも見える。

俺はただ——走った。

飯塚勇真が走っていくのを見つめる視線。その先で背中小さくなっていく。

『それじゃあ、いきます』

半ば呆然と、その背中を見ていた少女に。

『カミュ』は言った。

——背中に翼を持っている。

先ほどの少女よりも十ほど年上に見える彼女は。

本物の天使――。

天使の仕事は幾つもある。告知と、――天に魂を運ぶ事。

「義姉さんは本当に？」

先ほどまで、勇真にカミュであると名乗っていた少女が口を開く。カミュに体を貸し与えていたのだ。

本当の彼女の名前は斗波クロエ。科乃の義妹、フランス人の継母の連れ子の少女。

天使に科乃の『最後の一日』を幸せにするために体を貸して欲しいと頼まれた少女。

――運命ならばせめて幸せに、と彼女はそれを受諾したのだ。

「……義姉さんを救えなかったの？」

運命は変えられる、のかもしれない。確定した後では望むべくもない。――しかし、作り替えた運命が以前より幸福とは限らない。

幸福のうちに死んだ者は死後救われる、不幸で死ぬ者が世界を憎めば世界は呪われ、反作用で死者も救いを得られない。罪業だ。

天使はそれを減らそうとするのだ。世界が呪いに殺されないように。

――故に天使は人の死を避けようとはしない。

幸福に死ぬのなら幸いであると、考える。

――けれど、そのことをカミュは口にしない。

『あなたは信じたのでしょうか？』

それは残酷な話。信じたから――天使に身を委ねたから、それ以外の可能性を喪失した。

クロエにはクロエ自身の理由があるのだが。それでも、預言を信じた。――預言はそれを信じた者を因果に取り込む。

『せめて、幸福に死ねたら』という物のために『生かすために足掻く』という選択を手放した。

『あなたは辛い決断をしたわ』

「――なにが？」

カミュは言わない、けれど。

『それに、あなたも彼の事が好きなのでしょう?』

——友達の兄。

——妹の友達の兄。

バレーボールは男子と女子が同じ会場で行うことがある。

最初の理由は他愛ない物だ。義姉の応援に来て迷っていたところを助けて貰った——とか、不意の怪我で絶望していた時に高度なテーピングで試合に出られるコンディションにもらった——とか。けれど、小さな好意も醸成されれば恋い焦がれる気持ちとして何処までも大きくなる。

そう、斗波科乃がそうであるように斗波クロエも飯塚勇真という男に、少なくとも憧れと呼べるだけの感情を募らせていた。

「義姉さんも好きだから、大好きだから譲った——と言う言葉は不適當だろう。」

他のやりようが考えつかなかった。

身近な人の死の予定を告げられたぐちゃぐちゃの頭で、ただ、最後の日を幸せに生きて欲しいと思ったのだ。

その事でクロエを責めることが出来るだろうか?

カミュが行く気配を見せたのでクロエは最後の質問をした。

「——義姉さんはどこに行くの?」

そうね、といってカミュは翼を揺らす。

『天使が連れて行くのだから——天国よ』

その言葉が最後。赤い空にとけていくように見えなくなる。ただ、白い羽が舞ったように見えた……。

（後書き）

友達に貰ったお題は『手羽元』でした。

ストックは無くなったので、お題募集中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077k/>

秋、赤い空、白い羽

2010年10月8日15時23分発行